人生の頑張り

W校　高等部二年

是永　陸

いつも秋になるとリスが外を駆け回り頑張ってどんぐりを集め始める。僕はよくどんぐりを頑張って集めているリスを見かける。リスは冬になると冬眠して集めたどんぐりを少しずつ食べる。そうじゃないとリスは死んでしまう。僕の冬はいつ来るのだろうか。必死で頑張らないと生きていけない。僕が人生でそれほど苦労する日はいつか来るのか？僕はこの夏、頑張りの意味が分かった。

今年の夏はいつものように始まった。暑い日が続いて汗が首の後ろに流れるのが当たり前になる夏。僕はいつも通りメドマウントというバイオリンのキャンプに七週間行った。今年でもう四年目。このキャンプはかなり慣れているキャンプだった。僕は服をバックに入れ、スーツケースを車のトランクにしまってサマーキャンプへ向かった。車の中では何

も考えないでぼんやりとしながら、車の中でワイワイ騒いでいる家族や、これからキャンプに出かけそうな車が通り過ぎるのを見ていた。サマーキャンプの場所までは五時間ほどかかり、車に乗っていて疲れてた僕はすぐ降りてオフィスでチェックインするために歩き始めた。僕はこの時まだ、この夏がどれだけ自分に影響するのか分かっていなかった。

　このサマーキャンプはアメリカだけではなく、世界中からバイオリン、ビオラ、チェロを弾く人たちが集まってくる所だ。そうやって世界中から音楽の生徒が来るので、すごいキャンプだと思うかもしれないが、全くそうではない。それほど上手くもない子が多いキャンプなのだ。僕はこのキャンプでは遊びを大切にしていて、毎年来る友達に会うのが本当に楽しみだった。

　そんな友達に会うのを楽しみにしている僕は、もう十六歳で高校では十一年生だ。なぜそのキャンプに行っているのかきちんと分か

っていない僕は、この夏びっくりすることを発見した。頑張りの価値。「なぜ人間は頑張るのだろう？人生では楽しいことばかりしていたら勝ちなのではないのか」と、僕は今までずっと思っていた。「人生苦労して頑張ってもきついだけじゃないか」と自分に言うことが多かった。だから何も考えないで自分の好き勝手な行動を取っていた。

サマーキャンプが始まってから約一週間くらいしてからのことだった。僕はコンサートホールの観客の席でプログラムを読んでいた。周りの電気が消え十九才くらいのチェリストが出てきた。その子は座ってチェロをじっと見つめ、一呼吸して弾き始めた。僕はその子のパフォーマンスから目が離せなかった。「どうやったらあんなに楽しそうに弾けるんだろう？」僕は羨ましく思った。その日は帰って自分でどうやったらあんなに弾けるのか必死に考えた。

その次の日、僕はまだ昨日のパフォーマン

スのことを考えて歩き回っていた。するとバスケットボールの音が聞こえてきた。誰がバスケなんかしているんだろうと思い、ふと振り向くと、昨日コンサートで弾いた子がバスケットボールを手でがっしり持って投げていた。そのボールはスポッとネットにかするように入り、地面にトスンと落ちた。僕はそこに立って、その子がボールをまた拾ってバスケットに投げるのをじっと見ていた。彼は上手かった。昨日のチェロもバスケも本当に上手かった。「僕は今まで何をしていたのだろう？」と思っていた。

今までの僕はよく学校が終わったら何時間も携帯で遊んでいて、バイオリンとピアノの練習も、学校の宿題も、きちんとやらなかった。何も本当に熱心にやりたいことが見つからない僕。友達といつもいつも遊びたかった僕。今まで何をしていたんだ？

「人生では苦労しなかったら、何の意味があるんだろう？」人生の意味とは何なのか？僕

はこの質問にはまだ答えられない。あのチェロとバスケが上手かった子が僕の考え方を変えたのかは分からない。もしかしたら他の理由があったのかもしれない。だがこの夏で僕は変わった。どうやって変われたのかまだきちんと分からない。多分あのチェロとバスケの上手い子がきっかけで、僕は変われたのかもしれない。人間は何がきっかけで変わるのだろうか。僕みたいに目指す人がいれば変われるのだろうか？それとも自分のことをきちんと理解して、反省をすれば人間は変われるのだろうか？僕はこの質問に答えられる日がくるか分からない。だが、僕は人生頑張れば楽しく生きていける。このことを心に思って僕自身の人生を生きていきたい。

言葉の暴力と立ち向かう私

LI校　高等部一年一組
武井　蓮乃

私は必死で繕った貧相な鎧を身にまとい前に進んだ。全身を覆ったその鎧はとても、とても重かった。私の手足を地面へと引っ張るように重みが体中にのしかかっていた。それでも一歩一歩暗闇の中を私はさまよい続けた。

「言葉」という容赦なく降ってくる槍の嵐を受けながら。

「言葉」というものは、人を深く、深く傷つける力を持っている。その尖った刃で切りつけられた人は、目には見えないけれど、心に致命傷にもなる傷を付けられる。「言葉」というものは日常的且つ身近なものだ。言葉を使わなかった日などないくらい、私たちの周りにあふれかえっている。「言葉」は私たちのすぐ近くにあるからこそ、その使い方にしばしば無頓着になってしまう。それゆえ、いつ、

どこから、私達を襲ってくるのかが分からない、本当に恐ろしい凶器に成り得るのだと私は思う。

「言葉」の被害にあった人は数えきれないほどいる。毎朝のニュースで日常的に流れている。「今日の午前九時にネットのいじめにあった高校生が自殺をしました。」耳をすませば、ほら、また聞こえてくる。それを聞いて、テレビに映っている大人達は偉そうに、「彼女は負けたんだ」、「彼は弱かったんだ」、そう吐き捨てる。誰一人として、彼女、彼らを傷つけた犯人を咎めようとしない。「自分さえよければいい。」そう、自己中心的な考えを誇らしげに掲げ、のうのうと生きている人々がいる。それが、今、私たちが生きている世の中だ。

私は昔、この「言葉の暴力」の被害にあったことがある。それは、ある日突然私の体を貫いた。

「ねえ、蓮乃ちゃんて話しかけづらいし、暗そうだし、何か嫌いだわ。」

コソコソと話している声が私の耳の中に飛び込んできた。典型的な「悪口」だ。心無い台詞を平然な顔をして言っていたのは「友達」だと思っていた子だった。私は何も信じられなくなった。友達だと思っていた子にも裏切られ、「言葉」に深く切りつけられた私の心はボロボロだった。

その後、「友達」だと思っていた子は何事もなかったかのような顔で私に普段通り話し掛けて来た。私は自分が傷つかないために、素早く笑顔という鎧を身にまとった。でも、その鎧はとっさに作り上げたものだったので、そのようなものでは「言葉」という鋭利な刃には太刀打ち出来なかった。私の心はすぐには立ち上がれないぐらいの傷を負い、倒れこんでしまった。

このような出来事が何回か繰り返されたが、それでも、私は何とか反撃に出ようと考えた。自分を守るために、私も「言葉」という鋭利な剣を引き抜こうと思った。「言葉の暴

力」に太刀打ちが出来るのは、やはり「言葉」の剣だと考えたからだ。私はその剣を振り上げ「友達」だと思っていた子に突き付けた。「どうして、根も葉もない悪口を言いふらすの。」怒りで声が震えた。

しかし、その瞬間、空にたくさんの槍があらわれた。クラスにいて、私の声を聞いた子たちが振り上げた「言葉の暴力」の槍たちだった。その槍たちは一切の迷いもなく私の方へと降ってきた。槍たちが、私の体をいっせいに突き刺そうとしたその瞬間だった。私の前に盾をもった勇者が現れた。その「盾」はたくさんの「言葉」で出来ていた。

そう、「言葉」は人を傷つけるだけではなく、守ることも出来たのだ。その勇者が私を守ろうとかけた「言葉」の盾が、周りに飛び交っていた凶器たちを跳ね返した。

「悪口を言っている方が悪いじゃん。蓮乃ちゃんは何も悪いことをしていない。」

はっきりとした口調で次々に皆をなだめ、納

得させていった。そうやって、その件は一件落着したのだった。

私の場合、運が良く、手を差し伸べてくれた人がいたからいいものの、今、この瞬間にも「言葉の暴力」の被害にあい、傷ついている人達が無数にいるのだ。

「言葉」というものは諸刃の剣だ。間違った使い方をすると、一言で人を殺せる。けれども、正しく使うと人を救うこともできる。機械の発達と共に、人と直接関わることが少なくなっている今こそ、私達は言葉の力と正面から向き合わなくてはいけないのだ。

「言葉」は武器として人を傷つけるために作られた訳ではない、人を守るため、救うために作られたと私は思う。「言葉の暴力」の次の被害者、加害者は皆さんかもしれない。同時に、言葉を使って誰かの勇者にもなれる。言葉の使い方次第なのだ。言葉で誰かを殺すよりも、誰かの救世主になりたいと私は思う。

長い夜

LI校　中等部二年一組
延原　伶

「救急車をお願いします。」
私は母と二人でアメリカから、日本の祖父母の家について、２日目の夜中の事でした。
母が電話で話している声で目を覚ましました。その時、お腹を抱えて、痛そうにのたうち回る祖母の姿が目に飛び込んできました。私は驚きのあまり。声も出せない継母の横で立ち尽くしていました。それから、数分が経ったと思います。救急車のサイレンの音が耳に入ってきました。そして回転灯が赤々と光っているのが窓から見えた途端、
「荒木さん、荒木さん大丈夫ですか。」
と。救急隊員三人が家の中に入って来ました。救急隊員は、全く焦る事なく母に事情を聞き祖母をタンカに乗せて救急車に運びました。母は救急車に乗り込む前に、私の顔を見て、
「じいちゃんの事、頼んだよ。」

と言いました。そして、救急車は、又サイレンの音を辺りに鳴り響かせ、祖母と母を乗せて行ってしまいました。私は祖母の心配もありましたが、車椅子の祖父を一人で守らなければいけないという責任感と不安が込み上げて来ました。

祖父を守ると言うことが不思議に思われるかもしれませんが、実は九年前の夏、祖父は脳出血を起こし、言語障害を伴う右半身麻痺になり、身の回りの事がほとんどできない重度な介護が必要な体になっていたからです。私は取り敢えず、祖父のベッドの横に行き

「お婆ちゃんは病院に行ったから安心して。」

と、少しでも心配を取り除こうと話しかけました。他にする事は、と考えていると祖母がいつも口癖のように、

「地震や津波が来たら、一人で爺ちゃんを車椅子に乗せて坂道を押して避難できるか心配。」

と言っていた事を思い出しました。もし、今

地震が来たら、車椅子をベッドの横に置き、祖父をベッドの角に座らせてと、祖母がいつもしている様子を思い出しながら、頭の中でシミュレーションを繰り返すと同時に、もし今、泥棒が入って来たらどうしようと、色んな不安な事が頭を巡り、怖くて体が震えてきました。時計を見ると、まだ夜中の一時を回ったところでした。取り敢えず、私は祖父のベッドの横に自分の布団を引き、横になりました。

祖母が体を壊すなんて、今までに一度も無かったので、祖父も心配で眠れなかったのか、

「ばあちゃん、だいじょうぶか。」

と、いつもの辿々しい言葉で何度も聞いて来ました。祖父は夜中に何度もトイレに行くと言ったり、祖母の姿が見えなくなると、大きな声で祖母を呼ぶと言う毎日なので、私以上に不安だったに違いありません。

いつの間にか眠っていた私は、母の鍵を開ける音で目を覚ましました。私は、母の顔を

見た途端、肩から力がどっと抜けました。ふと時計を見ると、もう朝の六時です。母が出て行ってから五時間程の間でしたが、私にとって、今までに味わったことのない不安で、心細くて、とても長い夜でした。

祖母は搬送先の病院でそのまま入院になりましたが、入院期間が未定な為、家にいる祖父も介護施設に泊まることにしました。祖父は普段、通院ですら家を離れたくない人なのに、この日は祖母が入院したことを話すと、自ら泊まりの準備をしようと車椅子で部屋をうろうろし、左手で鞄に、歯ブラシやタオルなど必死で入れようとしたのです。そう言えば、夜中も祖父は私に負担をかけないように、トイレもいかず、我がままも言わずに頑張っていたのだと思いました。

その後、私と母は祖母の病院と。祖父の施設に毎日通いました。祖母は、自分に体が大変なのにも関わらず祖父の心配をし、祖父は私達が施設にいる間中ずっと、

「ばあちゃん、げんきか。」
と聞き、元気な様子を伝えると、
「よかった、よかった。」
と何度も、何度も繰り返し言っていました。
私達がアメリカに帰国する日が近づくにつれ、祖母の病状も良くなっていき、帰る前日には退院日もきまり、私たちは少し安心してアメリカに帰って来ました。
今回の日本滞在は、とても大変でしたが、もしかしたらこの出来事は私達が日本にいる間に起きて良かったのかもしれません。そして、祖父母のお世話を通して家族の絆の深さを今まで以上に強く感じることが出来ました。私にとって祖父母と、そして両親を、これからも大切にしていきたいと改めて考えた夏休みになりました。

日本語と英語

W校　中等部二年一組
池田　悠依

私は、日本とアメリカの二カ国に住んだことがあるので、日本語と英語という二つの言語を同時に使うことが毎日の一部となっています。このように常に使っている英語と日本語を比べてみると、二つの言語のそれぞれの違いや特徴に気付きました。

日本で生まれ育った私は、家族などとの会話を昔はすべて日本語で行っていました。小学校三年生の時にアメリカのフロリダ州へ引っ越し、英語の読み書きや英会話を習得した中で、新しい言語を習いながら、英語にはない日本語の様々な特徴を改めて意識するようになりました。

島国である日本の外ではなかなか耳にしないこの言語は、外国語に翻訳することが難しい、日本語ならではの表現が沢山あります。例えば、食事の前に必ず言う「いただきます」、

そして食べ終えた時に言う「ごちそうさま」という表現は英語に訳すことが大変困難です。もちろん、アメリカでは食事の前に祈る家族もいますが、最近はこの習慣もまれであり、日本に存在する習慣とは意味が違います。この二つの表現は肉、魚、植物などの食材の命、材料を育てたり獲ったりした人々、出来た食べ物を運搬し販売した人々への感謝の気持ちや敬意を示すものです。このように、毎日無意識に使っている表現の一つ一つが深い意味を持ち、日本語そのものに日本という国の歴史や文化、考え方などが生きているということは、この言葉が持つ長所の一つだと思います。

一方、私がアメリカに滞在しながら気付いた英語の美点の一つは日本語と違い、その実用性であると思います。この言語は二十六個の文字でできた単純なアルファベットを使い、習得することが日本語などに比べると簡

単です。世界中で使われ、現代の国際的な社会で生活する人々にとって大変重要である英語は、国境や言葉の壁を超える、他国の人達とのコミュニケーションに欠かせないものだと思います。どれだけ素晴らしい考えがあっても、相手が理解できない場合、何の意味もありません。英語のように沢山の国で使われる言語を使いこなすことによって、多くの人々に自分の意見や考えなどを届けることができるのです。一つの国だけではなく世界中で通用し、異なる国で育った人々が話し合うということを可能にする点は、英語が持つ魅力であると思います。

独特な歴史や文化によって作られ国そのものの特徴や、日本人の考え方が一つ一つの語句に表れている日本語。世界中で使われ、文化や国籍が違う人を繋げることができる英語。どちらもその言語を毎日使っている沢山の人達、そしてその言語をもとにして築かれている社会にとって欠かせない存在です。私

は、これからも日本語と英語の理解を更に深め、将来の経験に生かしていきたいです。

小学校最後の運動会

W校　六年二組

長谷　杏美

「今年の優勝は、白。」と、ぼくが何度も心の中でつぶやいたフレーズでした。

なぜなら、小学校最後の運動会で、ぼくは応援団長に選ばれたからです。ぼくが、練習校に入学して初めての運動会の応援合戦で、応援団長のエールを聞いた時から七年の間ずっと、「六年生になったら、必ず応援団長をやるぞ。」と、ぼくは、心に決めていました。

一学期の終わりについに応援団長を決める日がやってきました。ぼくは、あまり自分から手を挙げて発言をするタイプではありませんでしたが、今日は、絶対に手を挙げて、「ぼくは、応援団長をやりたいです。」と言わなければいけないのです。

ドキドキしたのが、立つ方はしましたが、心もがりたいし手を挙げた友達がいて、しても不安になりました。でも先生が、

「リレーの選手は、応援団長になれません。」
と言ったのでいっぱくはちょっと安心しました。
この時ぼくは、本当に足がおそくてよかったと心の底から思いました。
それから、多数決をとることになっていたが、
「長谷君は、声が大きいからいいと思います。」
と言ってくれました。先生が人数を数えて、
「長谷君で決まり。」
と言った時ぼくは心の中で「よっしゃ」とさけびました。ともともとてもうれしかったです。
この気持ちは、文章で表すことが出来ないくらい最高の気持ちでした。
ついに運動会の日がやってきました。
「プログラム十七番。全校児童による応援合戦です。」
ぼくはドキドキしながら、学生服を着て、白組の先頭に立ちました。何度も練習した通り、両手を後ろで組み、体をなるべくそらして空を見上げました。大きく息を吸っておな

かの底がうなりました。

「白組、応援。」

と言ってしまったのです。ぼくは小さくなりました。でもおちついて、みんなの声が静まるまで待ちました。

「オー。」

と言ってしまったのです。ぼくは小さくなりました。でもおちついて、みんなの声が静まるまで待ちました。

「行くぞ。」

「オー。」

今度は白組全員が一つになりました。それから後は、気合いを入れて一生懸命の限り全力で応援しました。

とうとう結果発表の時になりました。ぼくは勝っても負けても、毎年のように精いっぱい応援したので、結果は気にしないつもりだったけれど、やっぱり優勝の人にファイターを受け取ってみたいと思いました。結果発表待つ間、ぼくはドキドキしながら心の中で、

「神様どうかお願いします。白組が優勝し

ますようにというのっていました。

「今年の優勝は。」

と校長先生がいった後、しばらくして、

「白！。。」

と聞こえたしりんかん、ぼくは思わずクラスメイトとだきあって喜びました。本当に、うれしかったです。

それからぼくはトロフィーを受け取るために白組の代表として前へ出ました。まず赤組応援団長としゃくしゃをしました。なぜそうしたかはにがつなのいけい自然としゃくしゃをしたい気持ちになったからです。校長先生から受け取った優勝のトロフィーは、大きくてずっしり重くてピカピカでした。トロフィーには、ぼくのうめしをうかべた顔が、映っていました。

こうしてぼくの小学校の最後の運動会が、終りました。ぼくは、応援団長になるという人生で一度きりの経験ができてよかったと本当に思いました。

ぼくの頭がばく発する前に

L工校　五年　一組
クラーク　将人

クロムブックの中のグーグルクラスルームに先生から宿題のお知らせが入る。今日は三つ。台所で夕食を準備している母から「宿題ちゃんとやってる？」と聞かれる。弟の和馬が学校で聞いたことをふざけながら話しかけてくる。後四十五分でフラッグフットボールの練習が始まる。そう言えば、練習の後少しでも、友達のジムが買った新しい魚を見に行きたい。もうそこでジムの魚のことでぼくの頭はいっぱい。関係ないものを考えている時に限って、母にまた「宿題ちゃんとやってる？」と今度は強い口調で聞かれる。時計を見ると、思ったよりずっと時間がたったことに気が付く。あっ、やばい。ピアノもバイオリンもまだやってない。ちょっと待てよ、まだ補習校のドリルが残ってることを思い出す。もうここで頭がばく発しそうになる。

ぼくは今年現地校で中学生になった。中学生になってから、一日があっという間に過ぎる気がする。教科が変わるごとに、教室から教室へ移動をする。先生が教科ごとに全部で九人いる。ほとんどの宿題はグーグルクラスルームでシェアされる。移動時間があるので自由時間が減った。けれど、中学生になってから大変なことばかりではない。例えば、理科では小学生よりずっと多くの実験をする。ようち園から知っている友達とグループ学習する機会が増えて楽しい。中学生のみんなと、ボストン、フィラデルフィア、ワシントンディーシーに泊まりで社会科見学ができる。パソコンで勉強をすると大人になった気がするミドルスクールの勉強はもっとむずかしく、面倒くさくなったかもしれないが、今までよりも興味深い内容の学習がいっぱいある。宿題は、中学生になって初めて、母ではなく自分の責任で、宿題のはん囲や提出日を確にんすることになった。中学生になってからは二

回宿題を忘れただけで、評価が一に下がるとも聞いた。パソコンで作業する時は、ゲームのアイコンをクリックしたり、グーグルドックスで友達に話しかけたりする気持ちをおさえて宿題をするのは簡単なことではない。中学校生活は、勉強の質も量も増えたが、たった一年前の自分とも比べられない程全て変わった。今年ぼくが目標にすることは、持ち物や宿題、学校のスケジュールに少しでも責任を持つことだと思っている。

ぼくは現地校以外にも、トラックアンドフィールド、フラッグフットボールと、バスケットボール、ピアノやバイオリン、それと補習校でも勉強している。全部の時間を現地校の宿題に使う事はできない。ぼくは中学生になって、十一年続けた補習校や四才から始めたピアノを本気でやめようと思った事はない。本当にない。ぼくだって補習校の宿題が面倒くさい気持ちだってあるし、言われるまでやりたくない気持ちもある。でもやめたいかと

聞かれると、それは絶対にやめたくない。ぼくの母は、「やりたいなら、宿題や練習をきちんと毎日やりなさい」と言う。ぼくもそれに同感する。けれどそれはすごく大変なことだ。宿題や練習をきちんと終らせられるスムーズな日もあれば、あれもやってない、これもやっていない、全部終わらないほど積み上がって、今にも頭がばく発しそうな日もタタいでもばく発させている場合ではない。ぼくは人生を宿題でいっぱいにしてはいけない。それは、宿題と同じ位大事なすばらしい事がたくさんあるからだ。それは、スポーツ音楽、家族、友達との遊びや補習校などだ。しゅみのはちゅうるいや魚の世話などもある。この中で、どれか一つだけが大事なのではなく、全部すごく大切だ。だけどこれを全部続けるには、何かにいつでも気を配ってなくてはいけない。それは何か。それはスケジュールと時計、つまり時間だ。

今週は、毎日スポーツや音楽の練習がある

から、日曜日ねる前までに補習校の宿題を終わらせないとな。金曜日の放課後はピアノがあるから、漢字テストの練習は、木曜日までに終ってないとな。時計を見るのはこれしつながる。今日は五時半からフットボールの練習が始まる。準備と移動に十分かかるから、五時半に宿題が終わってたら絶対に間に合わない。日曜日の四時にバースデーパーティーがある。という事は、補習校の後だけど、宿題に手を付けないとまずいな。頭がばく発しそうになる時もたしかにある。だけど時計を見ることと、スケジュールを管理することに気を付けたら、宿題や練習で、頭をばく発させずに、何とか行けそうだ。

タップとの思い出

W校　五年二組

フェルナンデス　健

ぼくは、ぼくのうちの犬、「タップ」について書きたいと思います。その理由は、タップはもう体が弱っていて、いつ亡くなってしまうかわからないほどだからです。タップはもうすぐ十五才です。人間の年にすると百才以上になります。大好きなタップのために、思い出を書き残したいと思います。

タップとぼくとの一番最初の思い出は、ボール遊びをした時のことです。ぼくはまだ三才で、そのころのタップは若くてとても元気でした。その時の様子が動画さつえいされているので、今でもその動画を母と見ることがあります。タップは投げられたボールを追いかけて捕らえ、口にくわえて持って帰ってきます。自分があきるまでボールを投げてほしいとお願いするように持ってきます。ぼくはまだ小さく、ボールを遠くに投げることがで

きなかったので、タップはぼくにボールをくれませんでした。母がボールを投げるのを止めるとタップはボールを持ってはなさなくなります。口にくわえてかんで遊びます。ぼくはいつもタップの口からボールをひっぱり出さなくてはいけません。タップはやさしいので口からはなしてくれます。でも、ぼくがボールを投げてもあまり遠くに行かないので、ボールキャッチはあっという間に終わってしまいます。タップはつまらなくなると、ボールを持って逃げて行ってしまいます。ぼくは、そんなタップのことを何度も追いかけたことがあります。タップはぼくに比べると走るのが速いです。今のぼくと昔のタップだったらぼくが少し遅いかもしれません。

タップとのもう一つの大切な思い出はハロウィンです。ぼくのうちには、タップの他にも犬と猫がいるのですが、毎年タップだけ、ハロウィンの仮装をします。タップはいつもかぼちゃになります。ぼくのインドの祖母は、

20×20

タップのことを「タップキン」と呼んでいました。母が「タップキンにはパンプキンがお似合いだね。」と言い出したことから、タップをかぼちゃにすることにしました。ぼくたちの「タップキン。パンプキン」はとてもかわいいです。とてもかしこい犬なので、ぼくたちがやってほしいと思うことをよくわかっていて、いやがらずにコスチュームを着てくれるのです。ハロウィンには、「タップキン・パンプキン」の写真がたくさんあります。

タップはぼくの宝物です。オレンジ色と白の二色のめずらしいボーダーコリーです。ぼくが生まれる五年前に家にやってきて、ぼくは生まれた時からずっとタップといっしょです。最初はお兄ちゃんだったのに、いつの間にかおじいちゃんになってしまったタップ。タップは、ぼくのうちの家族になってから、日本やホンコン、イギリス、インドなどいろいろな場所で暮らしました。最後のハロウィンは、ふるさとのアメリカです。タップの具

合いが良くないので、今年は早めにハロウィン写真をとりました。本当のハロウィンまであと二週間ありますが、いっしょにいられるといいなと思います。もしも来月の十一月十三日のたん生日までいてくれたらもっとうれしいです。

タップは一日のほとんどを寝て過ごしています。もっともっといっしょに遊びたかったけど、タップはもう遊べないし、動けません。それでもいっしょにいる時間はとても大切なので、毎日たくさん話しかけて、なでてあげます。

目の不自由の人の生活

L工校　四年一組
上釜　樹珠

ある日、私はしそふりかけのパッケージに、小さなうき出た点があるのに気付きました。それは、点字という目の不自由な人のための文字でした。その時は、私はそれが何かわかりませんでした。でも、ほ習校の国語のじゅ業で「手と心で読む」という話を読んで、点字のことについて学び、私の周りのいろんな所には、実はたくさん点字があることを知りました。点字以外にも、目の見えない人のための色々な工夫があります。わたしは、目の不自由な人がどんな

16×16

生活をしているのかをもっと知りたくなりました。

まず、私が特にきょう味を持ったのは、目の不自由な人がどうやって自分で買い物をするのかということです。調べてみると、目の不自由な人が、お店で商品を探したり選ぶ時は、店員さんにあらかじめ買いたいものを伝えて、その商品があるところに連れて行ってもらい、商品のね段やサイズを教えてもらって、買うかどうかを決めるそうです。私は、このことを知って、そんな疲れることを毎回やるの！」とびっくりしました。私が目の不自由な人だったら、いつもだれかにたのんでいっしょ

「よ
に買い物しないといけないのは」
いちいち面倒くさいなあ」と思って
しまいます。
でも、日本では、目の不自由な人
が一人で買い物ができるような工夫
もあるそうです。商品によっては、
パッケージに商品の名前の点字がつ
いているものもあります。例えば、
私が見つけたゆかりふりかけや、ソ
ーダの缶やソースのボトルには点字
がついています。シャンプーのボト
ルにはギザギザがついていたりしま
す。目の不自由な人が、お金を払う
ときには、手でさわって区別できる
ように、コインには形や大きさ、穴
のあるなしがあり、お札にも印がつ

けられています。

このようなことを知って私は、目の見えない人が一人で買い物がしやすくなるために、あったらいいなという物を考えてみました。

一つ目は、お店に入って、どこに何があるかを教えてくれる音声ガイドです。それがあれば、だれかの手伝いもなく、一人で買い物しやすくなるかもしれません。

二つ目は、何か商品を深す時、スマートフォンのカメラでバーコードを読み取って、声で商品を説明するアプリがあったらいいなと思います。

これは、実さいに作ろうとしている人がいるそうです。

三つ目は、全部の商品に名前の点字がついていたらいいなと思います。これも実さいに、日本で、食品会社が、「食品の種類などの点字による表じをつけなければならない」というほうりつを作ろうとしているそうです。

私が目の見えない人の生活について調べている時に、お母さんから「バリアフリー」とは、しょう害のある人やお年よりの生活にとって、どうしたら困らないか、便利になるか考えて、かんきょうを整えたり、道具を使ったりして、「バリアへじゃまになるもの」を取りのぞくことだと聞きました。買い物のバリアフリ

しは、まだあまり進んでいなくて、目の不自由な人の生活はまだまだ不便です。

これから、目の不自由な人、そして他のしょう害のある人や老人にとって、もっと便利なものがふえるといいと思います。だれにとってもバリアフリーになるように私ができることは、点字を勉強して、いつか点字の案内などを作れるようになれたらいいなと思います。

寒すぎたチアリーディング

W校　三年一組

福井　理央

わたしは、はじめて、チアリーディングで、アメフトのおうえんに行きました。この日のために、毎週一回ダンスの練習をしてきました。ダンスをおぼえてチームのみんなと合わせるのもむずかしいですが、えい語のセリフをおぼえるのは、もっとむずかしかったです。

アメフトのし合の日は、朝から楽しみでした。なぜなら、自分がおぼえたダンスをはじめてみんなの前でできるからです。

会場に着いた時、たくさんのお客

さんたちが、アメフトのし合をおうえんしに来ていました。わたしは、ますますワクワクしてきました。

先生に会うと、まだとどいていないかったスカートをもらい、ポンポンももらい、本物のチアリーダーになった気がしてとびはねるくらいうれしかったです。

ですが、ここからがわたしのじごくの始まりでした。

わたしはさいしょ、アメフトのし合のハーフタイムでげしおどるのかと思っていました。ところが、し合の始めから終わりまでずっとおどりつづけたのです。この日は、とても寒くて夜のし合だったので、はくい

きも白く、ブルブルとふるえてしまいました。しかし、わたしは寒さをぐっとがまんして、今まで練習してきたダンスをしっかりおどりました。

「レッツゴーハスキーズ。」

えい語のセリフも大きな声でさけびました。

そしてさいごは、先生がうれしそうに

「わたしたちが」

と言っていました。わたしたちは、わになって、ポンポンを空高くなげてよろこびました。し合がか、たこともうれしかったけれど、これで、家に帰れると思ったらほっとしました。

このけいけんから、これからも

と寒くなるので、あたたかい上着を着て、あたたかいのみ物をもって行きたいと思いました。

寒さをがまんしながらえ顔でおどれたことは、わたしの自まんです。これからもダンスをもっと上手になってみんなに見せたいです。

一日だけのおねえちゃん

W校　二年四組
酒井　結菜

夏休みに、わたしのいとこが日本からあそびに来ました。いとこは、五才のおのちゃんと一才のいっちゃんです。日本に帰った時はいつもいっしょにりょ行に行ったり、あそんだりしていたから、アメリカに来てくれるのをずっと楽しみに

していました。

アメリカについた日、ひさびさに会えて、ほのちゃんとはいっしょにすぐあそび始めましたが、いっちゃんはわたしの顔を見ると、

「ギャーギャー」。

と泣き始めました。だから、わたしはおぼえていないのかなと思ってかなしい気持ちになりました。みんなでマンハッタンかん光に行き、

たくさん歩いてつかれたけど、おねえちゃんだからつかれたところを見せないように、ほのちゃんの手をつなぎました。いっちゃんのこともだっこしたかったけど、全ぜんなついてくれませんでした。

つぎの日、ほのちゃんのママとパパだけが出かけたから、わたしが二人のめんどうを見ることになりまし

た。
さいしょずっと泣いていたけど、いっしょに公園であそんでいるうちに、いつの間にかいっちゃんがわたしの手をにぎっていました。だっこもたくさんさせてくれて、わたしのひざの上にちょこんとすわって本当にかわいかったです。夜は三人でねました。

しかしつぎの朝、いっちゃんは自分のママを見つけ

たとたん、また元にもどってしまいました。もうだっこはさせてくれませんでした。

わたしはずっとおねえちゃんになりたかったから、あの日だけが完ぺきなおねえちゃんになれました。とてもさい高な一日でした。

つぎは、パパママなしで、ずっとあそびに来てくれたらいいのにな。

すきなもの

レエこうーねんーくみ

アリダーリンますみ

わたしは、ツメサラダが

だいすきです。サラトイツ

チにしてもおいしいし、そ

のままたべてもおいしいが

らです。それにおかあさん

が、

つさかなしおからだにいい

レ。

といっていたので、ツナを

たべるともちがうしるいの

さかなをたべれるかもしれないとおもったからです。

でも、あんまりたくさんツナをたべすぎると、ねこにとってしまうかもしれないとおもいました。

ねこにとってよくないたべものは、わたしがすきなたらや、マヨネーズとしモンじるをまぜたツナサラダはたべられないかもしれません。

ただのツナかんをそのままたべないといけません。

とくべつなときいがいは、
きっときゃっトフードだけ
です。ねこになるのはいや
だけどツナサラダがだい
すきすぎて、たべることが
やめられません。こまった
わたしは、どうしようもな
いので、おかあさんに、
「もしわたしがねこになら
たら、いつもどおりのツナ
サラダをつくってください。」
とおねがいすることにしま

しました。ねこにな。てもツナサラダをたくさんたべることができるとおもうとあんしんしました。よかったです。

くりの木

W木林一年一組

石川木林

うちのいえのにわには、大きなくりの木が二本あります。わたしは、おとうともいもうととくりをひろうのがとてもたのしみです。ことしは、一ばんたくさんひろえるかきょうそうをします。いつもかつのはわたしです。わたしがいつもさんかしますのは、

しは、たから さがしのようなくりひろい、がだいすきです。たくさんひろったら、わたしのおかあさんにくりをわたします。わたしのおかあさんが、

「きょうはたくさんとれたからくりごはんにしよう。」

といいました。わたしもくりごはんをつくることにしました。おこめをあらってみずとしおとおさけとみりん

んとくりをいれて、すいはんきをスイッチオンしました。あとはまつだけです。わたしとてもかんたんです。わたしとおかあさんでつくりたくりごはんをみんなでたべました。くりがあまくてほくほくでおいしかったです。おとうとおとうさんはおいしいとおかわりしました。

くりは、わたしにとって

おいしいにからものです。
まだくりが木にういている
ので、くりひろいとくりご
はんを、まだたのしめそう
です。わたしのいえにある
くりの木に、いつもおいし
いくりをありがとうとつた
えたいです。